

埼玉県衛生研究所報

ANNUAL REPORT
OF
SAITAMA INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH

No. 22

1988

埼玉県衛生研究所

第22号 昭和63年

ま え が き

昭和63年度の埼玉県衛生研究所の所報がまとまり、例年のように、研究所の業務、研究について御報告することになりました。

日本における公衆衛生、生活環境の発展とその速度は、平均余命ののびにみられるように誠に目覚ましいものがあります。

衛生研究所の業務あるいは研究内容も当然変化しており、年々の報告はその一断面を示すものです。従って現在の状況と共に歴史的な意味でも評価がなされると思われます。

しかしここ数年でみる限り、そう大きな変化はないようにみえます。埼玉県は言うまでもなく、日本は人口の老齢化、情報化社会、国際化の急速な流れの中にあります。現在その徴候は小さな芽を論文、業務報告の中に垣間みる程度です。

日本社会の老齢化の急速な進展は将来あらゆる面で最大の問題となると思われれます。公衆衛生を基盤とする衛生研究所も活発に取り組み、その結果を所報に報告されると思います。

感染症疾患は勿論、成人病についても、解析には病原微生物、疾病、生活環境に関連する資料等データベースの構築が必要であり、その情報の還元にも情報ネットワークシステムの確立が望まれるところです。

衛生研究所にとって、マンパワーの養成は最も重要な仕事の一つです。それは近隣諸国にとっても同様で、その交流は次第に活発に、広範囲になり、将来はこちらからも海外で協同研究に従事することになると思われ、相互の人材の養成に大きな糧となるでしょう。

業務と研究のバランスの上にたち、人々の保健について模索する職員の業績が、以上3つの観点からみて、10年後の所報にどう反映するか期待するものです。

昭和63年12月

埼玉県衛生研究所
所長 方波見 重兵衛

目 次

1	沿 革	1
2	組織及び事務分掌	2
3	職 員	3
	(1) 職員の配置状況	3
	(2) 職員名簿	4
4	業務報告	6
	(1) 疫 学 部	6
	(2) 病理細菌部	9
	(3) 化 学 部	14
	(4) 食品衛生部	15
	(5) 環境衛生部	19
5	研修業務	21
	(1) 保健所等職員の技術研修実施状況	21
	(2) 所内職員の研修実施状況	22
	(3) 海外研修生の研修実施状況	22
	(4) 海外出張	22
6	調査研究（論文）	
	埼玉県における感染症サーベランス情報による患者発生状況の推移	23
	無菌性髄膜炎のウイルス検出状況	32
	埼玉県における梅毒の血清学的考察	
	3. <i>Treponema Pallidum</i> 抗体陽性例におけるIgM抗体について（1985～1987年）	38
	家庭用品検査（tetrachloroethylene及びtrichloroethylene）に用いるガスクロマトグラフィー用	
	内標準物質の検討	43
	ヘッドスペース法による水中の臭素イオン及びヨウ素イオンの測定	48
	有機スズ化合物のGC測定時におけるカラム条件等の検討	52
	埼玉県における家屋内ダニ類の生態学的研究—秩父地域の住宅における室内塵中のダニ相について	56
	多変量解析による小児の肺気量，肺換気能力の正常値に関する研究	64
	小中学生の肺換気能力測定について	73
7	調査研究（ノート）	
	インフルエンザワクチン接種における抗体調査	81
	海外修学旅行時に感染したと推定される集団下痢症	86
	水道水中のCNP及びメ-52の調査	92
	魚網防汚剤TBTの検出状況と魚体内分布について	95
	生食用魚介類の細菌汚染実態調査	97
	和生菓子の細菌汚染実態調査	101
8	資 料	
	昭和62年度の埼玉県における伝染病流行予測調査	107
	埼玉県の腸管系伝染病菌検出状況（1987年）	111
	海外旅行者の腸管系病原菌検索（1986年）	114
	海外旅行者の腸管系病原菌検索（1987年）	118
	感染症情報管理事業に伴う溶血レンサ球菌検査状況	122
	埼玉県内の水道の水質（昭和62年度）	124
	大宮市における蚊の発生消長（1985～1987）	125
9	紹 介	
	眼科医師の将来需給に関する研究	131
	保健統計のデータベース	131

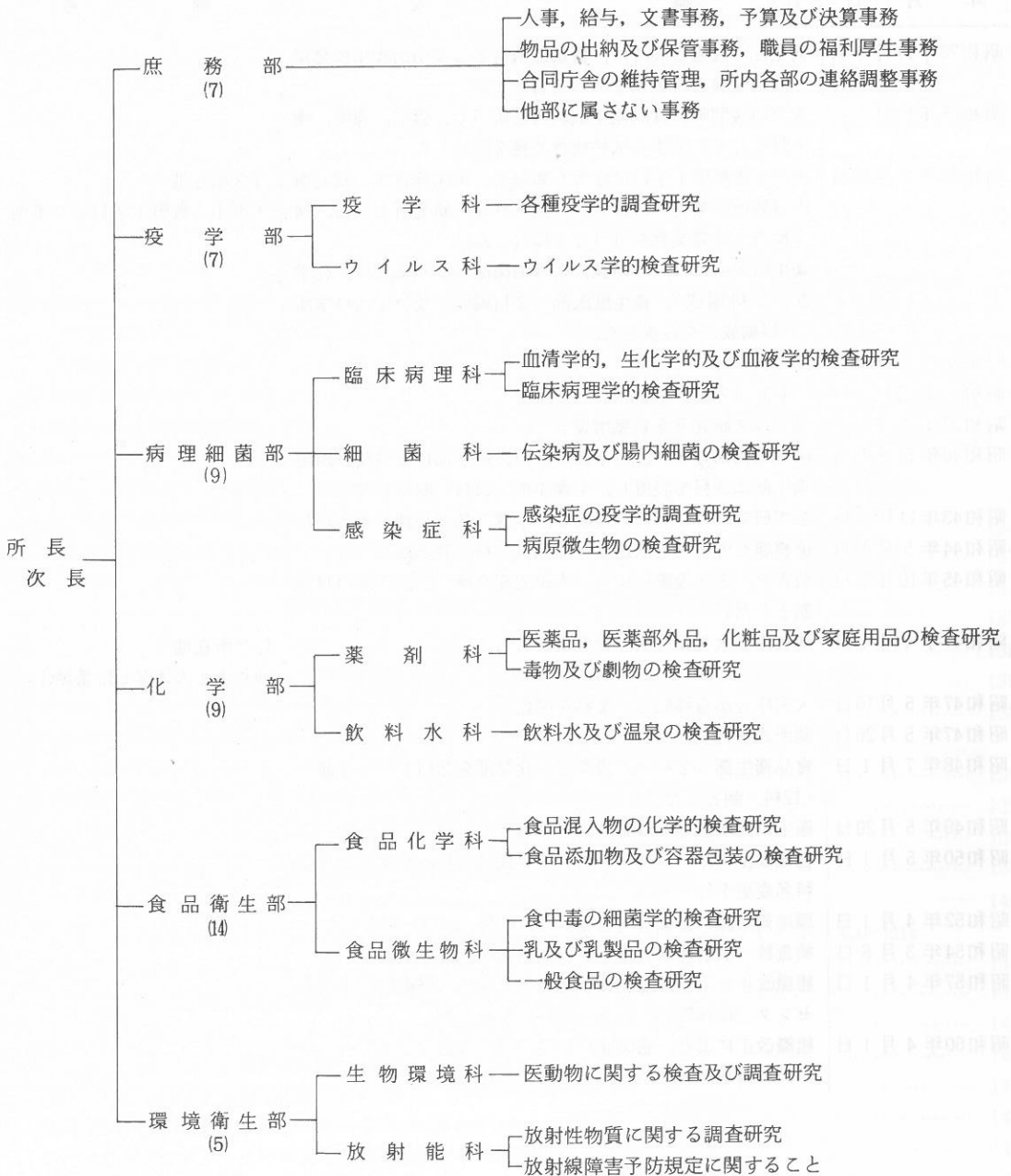
チアベンダゾールとその1-アルキル誘導体数種の防カビ効果に関する比較	131
埼玉県における感染症サーベランス情報-昭和55年~昭和61年までの患者発生状況推移-	131
ヒト血清中の無機成分について	131
感染症サーベランスによるエンテロウイルスの検出状況(1985~1987年)	132
埼玉県におけるウイルス性胃腸炎の集団発生	132
埼玉県における臨床材料由来のレンサ球菌の動向(昭和56~60年度)	132
海外旅行者下痢症の病原菌検査(1987年)	133
病原体に対する免疫力に関する研究	
1. 学童のポリオウイルス中和抗体保有状況	133
ポリオワクチン服用Lot別, 兄弟有無別のポリオ型抗体保有率	134
埼玉県両神村小学生のポリオ中和抗体保有状況	134
埼玉県浦和市内小学生と両神村小学生におけるムンプスHI抗体保有状況	135
埼玉県内の山村地域における学童の麻疹, ムンプス抗体保有状況	135
埼玉県のサルモネラの血清型及び薬剤感受性(1987年)	135
海外修学旅行で感染したと思われる集団下痢症	136
家庭用品検査に用いるガスクロマトグラフィー用内部標準物質の検討	136
Mutagenic Principles in <i>Senomeni Caulis et Rhizoma</i> (I).	
The Structure of a Mutagenic Alkaloid, N-Dimethyl-N-formyldehydro-nuciferine,	
in the Neutral Fraction of the Methanol Extract.	136
ポオイのメタノール抽出物中の変異原物質(第2報) 塩基性画分及び酸性画分について	137
川芎の抗突然変異原性	137
水道水中のシアニオンの分析法の問題点とその改良	137
尿酸と塩素との反応による塩化シアン生成	138
水道水中のCNP及びX-52の調査	138
高速液体クロマトグラフィーによる鶏肉, 豚肉及び牛肉中のタイロシンの定量	138
畜水産食品中の残留抗菌性物質の分析に関する研究(VIII)	
市販アユ中のオキシリン酸残留調査	139
高速液体クロマトグラフィーによる牛乳中のナフシリンの定量	139
ニンニク中の生理活性成分の分析に関する研究	139
アスパルテーム分解産物の分析	139
食肉中の残留有機塩素系農薬について	140
Somultaneous Liquid Chromatographic Determination of Residual Synthetic Antibacterials	
in Cultured Fish.	140
荒川における細菌汚染と発熱性物質およびエンドキシンについての考察	140
農業用水中の発熱性物質と細菌類およびBODの検索	141
水中の病原性細菌の定性的検出法-塩化第二鉄による沈澱法の改良法の開発-	141
和生菓子の黄色ブドウ球菌汚染状況について	141
果皮内側が赤変していたみかんからの <i>Serratia marcescens</i> 分離例	142
パーソナルコンピューターによる呼吸機能検査の精度管理	142
埼玉県における放射能調査(昭和61年度)	142
小中学生の肺換気能力測定値について	142
試験容器内におけるチャバネゴキブリ成虫の餌トラップへの反応	143
水田地帯におけるアキアカネ幼虫とシナハマダラカ幼虫の生息状況と捕食関係	143
10 所内セミナー実施状況	143
11 著者名索引	144
12 投稿規定	146

1 沿革

年 月 日	概 要	備 考
昭和22年11月4日	衛生部の設置と同時に、警察部所管として明治30年に発足した細菌検査所を衛生部の所管とした。	
昭和25年10月	大宮市浅間町に食品衛生試験所を新設し、食品、環境、衛生獣医などに関する試験検査業務を開始した。	
昭和28年2月15日	大宮市吉敷町1丁目に庁舎を新築し、細菌検査所と食品衛生試験所の業務を合併して、埼玉県衛生研究所として試験・検査・研究業務を行うことになった。 衛生研究所には、庶務課、病理細菌部（3科編成）、化学部（2科編成）、衛生獣医部（2科編成）及び生活科学部（2科編成）を設置した。	庁舎所在地 大宮市吉敷町1丁目124番地
昭和28年12月11日	開所式を行った。	
昭和32年12月5日	放射能研究室を新築増設した。	
昭和37年9月12日	ウイルス研究室を新築増設した。	
昭和40年5月1日	病理細菌部に3科、化学部に3科、疫学部2科及び環境衛生部に3科を設置し、1課4部（11科）制とした。	
昭和43年11月1日	公害研究部（2科）を設置し、1課5部（13課）制とした。	
昭和44年5月1日	庶務課を庶務部と改正し、6部（13科）制とした。	
昭和45年10月1日	公害センター設置により公害研究部を廃止し、5部（11科）制とした。	
昭和47年4月1日	浦和市上大久保に新庁舎を新築した。	庁舎所在地 浦和市上大久保639番地1
昭和47年5月16日	大宮庁舎から移転し、業務を開始した。	
昭和47年5月26日	開所式を行った。	
昭和48年7月1日	食品衛生部（2科）を設置し、化学部を2科とし、6部（12科）制とした。	
昭和49年5月29日	衛生研究所敷地内に動物舎を新築した。	
昭和50年5月1日	組織改正に伴い、従来の科名を県民になじみやすいように科名変更を行った。	
昭和52年4月1日	環境衛生部に廃棄物科を設置し、6部（13科）制とした。	
昭和54年3月8日	検査棟（放射能研究室）を新築増設した。	
昭和57年4月1日	組織改正により、環境衛生部衛生工学科、廃棄物科を公害センターに移管し、6部（11科）制とした。	
昭和60年4月1日	組織改正により、感染症科を疫学部から病理細菌部へ、ウイルス科を病理細菌部から疫学部へ移管した。	

2 組織及び事務分掌

革 命



3 職員

(1) 職員の配置状況

(昭和63年4月1日現在)

職 別	事務吏員			技 術 吏 員							その他の吏員				合 計					
	部 長	主 任	主 事	計	所 長	次 長	部 長	専 門 調 査 員	科 長	主 任 研 究 員	主 任	技 師	計	主 任 (技 能)	主 任 (技 能)	技 師	技 師 (技 能)	計	科 別	部 別
所 長					1							1								1
次 長						1						1								1
庶務部	部 長	1		1															1	7
	事務吏員		4	4									2					2	6	
疫学部	部 長						1					1							1	7
	疫学科										1	2							2	
	ウイルス科							1	(1)		2	3		1				1	4	
病理細菌部	部 長						1					1							1	9
	臨床病理科										2	2							2	
	細菌科											2	3	1				1	4	
化学部	部 長												(1)						(1)	9
	薬剤科										1	2	2	5					5	
	飲料水科										1	1	2	4					4	
食品衛生部	部 長						1					1							1	14
	食品化学科										1	4	1	6	1			1	7	
	食品微生物科									1	1	3	5			1	1	6		
環境衛生部	部 長						1					1							1	5
	生活環境科										1	1	2						2	
	放射能科											1	2						2	
現在員合計		1	4		5	1	1	4	1	9	2	17	7	42	2	3		1	6	53

() 兼務

(2) 職員名簿

(昭和63年4月1日現在)

部 名	科 名	職 名	氏 名	事 務 分 担	備 考
		所 長 次 長 専門調査員	方波見 重兵衛 森 本 功 村 尾 美代子	所内統括 所長補佐 化学部長兼務 ウイルス科長兼務	医師 薬剤師
庶 務 部		部 長 主 任(事) 主 任(事) 主 任(事) 主 任(事) 主 任(技) 主 任(技)	石 井 秀 正 近 藤 麻 枝 田 口 春 江 大 熊 清 志 金久保 富治夫 塩 原 健 司 和 田 義 信	部内統括, 人事, 財産管理 經理, 物品管理 給与, 研修, 經理 經理, 文書, 福利厚生 予算, 物品, 庁舎管理 庁用車運転管理 庁舎管理, 動物飼育管理	
疫 学 科	部 長		吉 岡 勝 平	部内統括	
	疫 学 科	科 長 技 師	田 中 章 男 林 英 登 樹	科内統括, 疫学的調査研究 疫学的調査研究	臨床検査技師
	ウイラス科	科 長(兼) 主 任(技) 主 任(技) 主 任(技能)	村 尾 美代子 戸 谷 和 男 大 塚 孝 康 酒 井 正 子	科内統括, ウイラス学的検査研究 ウイラス学的検査研究 ウイラス学的検査研究 試験検査補助	薬剤師 臨床検査技師 獣医師
病 理 細 菌 部		部 長	奥 山 雄 介	部内統括, 細菌学的検査 血清学的調査研究	獣医師
	臨床病理科	主 任(技) 主 任(技)	河 橋 幸 恵 井 上 豊	生化学的検査, 血清学的検査研究 生化学的検査, 血清学的検査研究	薬剤師 薬剤師
	細 菌 科	科 長 技 師 技 師 主 任(技能)	大 関 瑤 子 倉 園 貴 至 砂 押 克 彦 島 田 サ ト	科内統括, 細菌学的検査研究 細菌学的検査研究 細菌学的検査研究 試験検査補助	獣医師 臨床検査技師
	感 染 症 科	科 長 主 任(技)	首 藤 栄 治 石 原 ひろみ	科内統括, 細菌学的, 血清学的調査研究 細菌学的, 血清学的調査研究	獣医師 臨床検査技師
化 学 部		部 長(兼)	森 本 功	部内統括, 医薬品等検査研究 水質検査研究	
	薬 剤 科	科 長 主 任(技) 主 任(技) 技 師 技 師	石 野 正 蔵 野 坂 富 雄 渡 辺 富士雄 高 橋 邦 彦 只 木 晋 一	科内統括, 医薬品等検査研究 医薬品, 毒劇物等検査研究 医薬品, 毒劇物等検査研究 医薬品, 毒劇物等検査研究 医薬品, 毒劇物等検査研究	薬剤師 薬剤師 薬剤師 薬剤師 薬剤師
	飲 料 水 科	科 長 主任研究員 主 任(技) 主 任(技)	北 川 豊 明 広 瀬 義 文 鈴 木 章 竹 澤 富士雄	科内統括, 水質検査研究 水質検査研究 水質検査研究 水質検査研究	薬剤師 薬剤師

部 名	科 名	職 名	氏 名	事 務 分 担	備 考
食品衛生部	食品化学科	部 長	能 勢 憲 英	部内統括, 食品等化学的調査研究	薬剤師
		科 長	星 野 庸 二	科内統括, 食品化学検査研究	薬剤師
		主 任(技)	松 本 隆 二	食品化学検査研究	
		主 任(技)	堀 江 正 一	食品化学検査研究	薬剤師 薬剤師 薬剤師
		主 任(技)	飯 島 正 雄	食品化学検査研究	
		主 任(技)	斉 藤 貢 一	食品化学検査研究	
	技 師	神 戸 正 美	食品化学検査研究		
		主 任(技能)	土 屋 みつ子	試験検査補助	
	食 品 微 生 物 科	科 長	徳 丸 雅 一	科内統括, 食品汚染細菌検査研究	獣医師
主任研究員		正 木 宏 幸	食品汚染細菌検査研究	獣医師	
主 任(技)		板 屋 民 子	食品汚染細菌検査研究	獣医師	
主 任(技)		青 木 敦 子	食品汚染細菌検査研究	獣医師	
主 任(技)		斉 藤 章 暢	食品汚染細菌検査研究	獣医師	
技師(技能)		川 口 千鶴子	試験検査補助		
環境衛生部		部 長	宮 沢 正 治	部内統括	臨床検査技師
	生物環境科	科 長	高 岡 正 敏	科内総括, 寄生虫原虫等検査研究 衛生害虫等検査研究	獣医師
		主 任(技)	高 浦 辺 研 一		
放射能科	科 長	中 沢 清 明	科内総括, 放射能測定, 分析調査研究		
	技 師	三 宅 定 明	放射能測定, 分析調査研究		

11 著者名索引

太字は筆頭者, *は当
所職員以外の者である。

- A
- 青木 敦子 97 101 141 141
- B
- 馬場 真美子* 73 142 142
- F
- 藤本 義典* 140
藤田 昌彦* 139 139
- H
- 羽賀 道信* 73 142 142
八尋 哲男* 131
林 英登樹 23 131 131
服部 昭二* 56 125
平井 茂* 142
平山 宗宏* 133 134 134 135 135
広瀬 義文 48 92 124 137 138 138
堀江 正一 95 138 139 139 139 139 140 140
星野 庸二 52 95 138 139 139 139 139 140
- I
- 飯島 正雄 52 95 140
池本 孝哉* 143
石野 正蔵 43 136 136 137 137
板屋 民子 97 101 141 141 142
岩崎 等* 136
- K
- 貝瀬 俊彦* 135
神戸 正美 95 140
方波見重兵衛 23 64 73 131 131 131 131 142
142
川名 孝雄* 142
河橋 幸恵 38
河内 卓* 136 142
北井 暁子* 23 107 131
北川 豊明 92 124 138
菅野 三郎* 137 138
小林 茂男* 32 132
小松 良子* 23 131 136
近藤 英明* 136
小山 典久* 32
菊池 好則* 95 140 140
京極 和旭* 136
- M
- 前田 和子* 131
前田 範子* 137
牧野 サチ子* 81
正木 宏幸 97 101 140 141 141 141
松岡 正* 136
峰岸 文江* 64
宮沢 正治 64 73 125 142 142 142
百瀬 隆人* 81
森本 功 43 48 92 124 136 136 137 137
137 138 138
森本 紀子* 133 134 134
望月 恵美子* 139
村尾 美代子 32 81 107 132 132
村田 元秀* 140 141
- N
- 中村 和伸* 135 135
中沢 清明 64 73 142 142 142
中沢 裕之* 138 139 139 139 139 140
長井 伸行* 56
名取 信策* 137
能勢 憲英 52 95 97 101 138 139 139 139
139 140 140 141 141
野坂 富雄 43 136 136 137 137
沼田 一* 139
- O
- 大島 まり子* 122 132
大関 瑤子 86 111 114 118 133 135 136
岡田 正次郎* 56
興津 知明* 48 136 137 138
奥山 雄介* 38 86 111 114 118 122 132 133
133 134 134 135 135 135 136
- S
- 斉藤 章暢 97
斉藤 貢一 95 138 139 139 139 139 140
笹本 和彦* 137
菅原 洋子* 136
首藤 栄治 114 136
杉下 和子* 133 134 134 135 135
砂押 克彦 64 86 111 118 133 135
砂川 誠* 97 101 131 141 141
鈴木 章 92 124 131 138

T

高橋 邦彦 43 136
 高岡 正敏 56 125
 武井 伸一* 64 73 125 142 142 142
 竹澤 富士雄 92 124 138
 只木 晋一 43 136 137
 田子 勝彦* 133 134 134
 田中 章男 23 131 131 131
 土屋 みつ子 95 140
 土屋 貢* 23 131
 手嶋 力男* 132 135 135
 土居 稜* 133 134 134
 徳丸 雅一 97 101 132 141 141 141
 戸谷 和男 32 107 132

U

浦辺 研一 125 143 143

W

渡辺 富士雄 43 136 137 137
 渡辺 益美* 142

Y

山口 正則* 86 111 114 118 133 135 136
 柳川 敬子* 141
 横山 満* 86
 吉岡 勝平 23 131 131
 吉岡 勇雄* 133 134 134

12 埼玉県衛生研究所報投稿規程 (昭和62年5月改正)

1 所報は、埼玉県衛生研究所で行った試験検査業務、調査研究、資料等を掲載する。投稿は、本所職員に限る。ただし、本所職員以外の共著者がある場合には、その所属を*印を用いて欄外に入れる。

例 * 中央保健所

2 衛生研究所報の内容

- 1) 沿革
- 2) 組織及び事務分掌
- 3) 職員
- 4) 業務報告
- 5) 総説 各種論文に基づく総説。
- 6) 調査研究 論文、ノート、短報。印刷物として未発表であり、新知見を含むものとする。
- 7) 資料 調査資料、統計。
- 8) 紹介 過去1年間の他誌発表論文及び学会発表の内容紹介。

9) 著者名索引

10) 投稿規定

3 調査研究の形式

形式は、序論(緒言、はじめに)、方法(実験方法、調査方法、材料及び方法)、結果(成績、結果及び考察)、要約(まとめ)、謝辞、文献の順とする。

4 紹介の形式

他誌発表のものは次の例による。

例 題 名

氏 名

日本公衛誌(1974): 21(10) 123—129.

要 旨(400字以内)

学会発表(口頭)のものは次の例による。

例 題 名

氏 名

要 旨(800字以内)

日本薬学会第105年会(1984): 金沢

5 原稿の書き方

- 1) 原稿は、所定の原稿用紙A4判(20×20字)に横書きで記載する。枚数は原則として、総説40枚、論文30枚、ノート15枚、短報8枚、資料10枚とする。ただし、規定枚数は、表、図及び写真を含む。
- 2) 調査研究及び資料の原稿には表題と著者名をつける。見出しは、原稿の真中に、上下1行をあけて書く。各見出し後の細部の各項目には、次の順序に数字をつける。1, 2, ……; 1), 2) ……; (1), (2) ……。
- 3) 数字はすべてアラビア数字を用い、文章は原則として現代かなづかいで、当用漢字を使用する。用字用語等については、原則として埼玉県発行「文書事

務の手引」による。

4) 文章中の句読点(、。), かっこ()は1字に数え、—(ハイフオン)は区画の中に明瞭に記入する。

5) イタリック体となる字の下には、———をつける。(例: *E. coli*)

6) 数量の単位は、m, cm, mm, μ m, nm, L, ml, kg, g, mg, ng, pg などを用いる。

7) 表、図の原稿及び写真は、別に、専用原稿用紙、または同型の紙に貼りつけ、本文の後につづり合わせる。表、図及び写真を入れる位置は、本文中の右欄外に矢印(←表1)で指定する。表及び図に関する注釈は、本文中には入れない。

例: 表2 分離菌株の薬剤耐性

(表の上の中央に記載)

図3 果実中の残留農薬

(図の下中央に記載)

Table 及びFig.などの英字を用いる場合は、表及び図全体について英字を用い、英文タイプ、またはレタリングを使用する。

8) 図は、A4判以下の大きさの平滑な白紙または青色グラフ用紙に黒インキで書く。図の印刷は、原則的には著者のものを用いるが、図中の文字につき活字の使用を希望することもできる。また、図のトレースを希望することもできる。図の大きさに希望があるときは、大体の大きさを指定する。

9) 引用文献は、山本¹⁾、赤痢菌²⁻⁵⁾のごとく1区画を与えて右肩に示し、最後に一括して列記する。

10) 文献の記載は次の例による。

例:

1) 高島 英伍(1981): 畜水産用薬物の現状と問題点, 衛生化学, 27, 127—143.

2) Ames, B. N. (1979): Identifying environmental chemicals causing mutations and cancer, Science, 204, 587—593.

3) 善養寺 浩, 寺山 武(1978): 微生物検査必携 細菌真菌検査 第2版, 264—276, 日本公衆衛生協会(東京)。

11) 脚注は、*印を用いて欄外に記入する。

6 原稿の提出及びその取扱いについて

- 1) 原稿は、所属部長を経て編集委員に提出する。提出された原稿については、編集委員会が検討を加える。
- 2) 編集委員会は、所長、次長及び各部から選出された編集委員で構成し、次長を委員長とする。

3) 校正時の原稿の改変は認めない。どうしても必要なものは正誤表による。

4) 初校及び二校は著者、三校（以後）は編集委員が行う。

所報編集委員

（アルファベット順）

石 井 秀 正
石 野 正 蔵
方波見 重兵衛
森 本 功*
村 尾 美代子
中 沢 清 明
能 勢 憲 英
奥 山 雄 介

（*編集委員長）

埼 玉 県 衛 生 研 究 所 報

第 22 号

平成元年3月印刷

平成元年3月発行

編集及び発行所 埼 玉 県 衛 生 研 究 所

浦和市上大久保東 639-1 ☎ 338

電話 048-853-6121

印 刷 所 株 式 会 社 太 陽 美 術

浦和市常盤 1-3-9

電話 048-824-3261
